

2005年度報告

後藤 明

調査期間 2005年7月28日～8月6日

場所 ニュージーランド（オークランド）およびトンガ王国（ヌクアロファ）

目的 主目的はヌクアロファで行われたシンポジウム *Oceanic Exploration* への出席と発表であるが、飛行機の中継点オークランドでマオリ関係の博物館の見学およびヌクアロファの博物館を見学も行うことを目的とした。

成果

(1) オークランドの海洋博物館 (Maritime Museum) では一室、沿岸捕鯨に関するかなり充実した展示があった。それによると「ニュージーランドの最初の沿岸捕鯨は Marlborough 湾の Te Awaiti であった。シドニーから来た Jockie Gounrd が 1820年代に捕鯨を始めたとき鯨は豊富だった。捕鯨者は Tory 海峡にこぎ出し、泳ぎの遅い right および humpback 鯨を銚で捕った。銚打ちは鯨の肺をめがけて銚を投げた。しとめられた鯨は岸に運ばれ、脂肪は短冊状に切られて鍋で煮られ、油が採取された。15年ほどで鯨は激減したが、1960年代まで船取り捕鯨は続けられた」。



(海洋博物館の捕鯨展示)

(2) オークランド博物館ではマオリ族が用いていた鯨骨製品、刺突器 *patu* (写真左、ハワイの篠遠喜彦博士がフアヒネ島で元型を発見したと昨年の調査でご教示を得ている)、また鯨歯の装身具 (写真右、類似品はやはり篠遠喜彦がマルケサスやソシエテ諸島で発掘) などが展示されている。また神話における鯨の創造に関する展示説明も参考になり、有意義であった。



オークランド博物館の鯨製品

(3) トンガ国立博物館にはとくに鯨製品はなかった。しかし民族誌にはフィジーやハワイ同様、王族の印として捕鯨時代以降珍重されたとある。

研究テーマと考察

(1) オセアニア、とくにポリネシア人は鯨の歯や骨を道具として利用し、また神聖視もしていた。しかし海洋民のわりには捕鯨は行わず、座礁した鯨を利用していた。このようなポリネシア人にとって鯨のもっていた象徴的観念を人工物利用、神話、あるいは民俗分類に探る。

(2) ハワイをはじめ、ニュージーランド、トンガ、フィジーあるいはミクロネシアは近代捕鯨の基地となった。その実態調査。

(1) (2) よりの考察：

近代捕鯨の開始によってマッコウクジラの歯などが大量に先住民社会に流入し婚資などとして流通また威信財として利用された。もともとポリネシア人一般に畏敬の念をもたれていた鯨が、今度はより現実的な財貨として別の象徴的重要性を獲得するにいたった。豊穡の神や神聖王のような首長の存在を象徴する鯨から、したたかな「商売人」としての首長を象徴する鯨のようにである。たとえばハワイではもともと鮫が征服者たる王の象徴であり(例 クー神)、鯨はどちらかというと座礁して富(=肉)をもたらすが、殺され、切り刻まれ、祖先の国送り返される存在であった(例 ロノ神)。しかしカメハメハによる統一後はむしろ征服者よりも神聖者ないし豊穡者としての王権の側面が強調される(サーリンズなどの議論による)。接触後ハワイの王族が鯨歯のペンダントを重要視するようになったのは、捕鯨者が大量に歯をもたらしたという現実的理由と、安定した王権の象徴として鯨がよりふさわしかった(捕鯨船はまさに王国に富をもたらす宝船という「象徴経済論」的理由)からではないか。

以上の考察は、後藤 明「海人の神話と世界観」『新地誌——オセアニア編』(朝倉書店、印刷中)に発表している。

<付記>

この科研で行ったのではないが、5月28日より31日までパラウに調査に出かけた。国立博物館の書店で、1832年に難破したアメリカ捕鯨船の乗組員がパラウにたどり着き、当時の模様を記し、最後に脱出してニュー・ベッドフォードに戻ったいきさつを書いた以下の書物を発見、購入した。

Martin, Kenneth R. (ed.), “Nakid and a Prisoner”: Captain Edward C. Barnard’s Narrative of Shipreck in Palau, 1832-1833. Trust Territory Historic Preservation Office, Saipan (1980).